



祝十周年



よりぬきそうろうつだもの

2005年（30歳）

実母

小さいころ、

「お前は橋の下で拾った子なんだよ」
という心底心細くなるような冗談を親から言われて育った人は多いんじゃないかと思う。

私はその別バージョンとして、動物園に連れていってもらったたびにゴリラの檻の前で、
「さあ、お母さんにご挨拶なさい」
と、そっと背中を押される、という手口で育てられた。

天然

県外の大学に通っている弟が「学 保険証」という個別の保険証を持つには、実家のあるこちらの役場でなんちゃら手続きをしないとイケないというので、早く必要な書類を送りなさい、と常々母は言っていたらしい。

必要な書類っていうのは住民票の写しか学生証の写しね。

ところで弟は今歯が痛いらしい。

歯医者に行きたいので一刻も早くプリーズ、と実家に書類が送られてきた。

母は一刻も早く承知！と、送られてきた封書の中身を確認しないで役場に行った。

カウンターで

「では、学生証の写しを」

と言われて出してみると、そこにはB4サイズみっちり拡大コピーされた弟の学生証の写しが入っていた。

懐かしい味

「肉じゃがの肉のかわりにウインナーを入れて作ると、小学校の給食の味になる」
という主張が、誰からも認められない。

痩せゆく男

よく行くお店の店員の男の子が、太れなくて困っている。

身長が173cmなのに、体重が47kgしかないそうだ。

うっすらと自分が太れない原因はつかめてきたという。

第一に、基本的に小食なこと。

第二に、一年三六五日中、三五〇日くらいは下痢の日だという、根っからの下痢体質。

第三に、牛乳や乳製品が大好きでほぼ毎日買っているが、それを摂取すると必ず下痢をしてしまうこと。

私が、
「牛乳飲まなかったらいいのに」
と言うと、
「牛乳大好きなんですよ！ 牛乳飲まないことと下痢を比べたら迷わず下痢を選ぶほど牛乳が好きなんです！」
と返してきた。

今は、太るためにプロテイン「体重を増やしたい人用」というのを飲んでいるらしい。
しかし、プロテインを飲むともれなく腹をこわすらしい。

脂肪より筋肉のほうが重いと聞いたことがあるので、
「筋肉増やしたら？ 筋トレとかしてさ」
とアドバイスすると、
「運動したら痩せちゃうんですよ」
という腹の立つ返事が返ってきた。

嫁として

旦那の実家に帰省してた。
旦那の実家にはなぜかいつも若者がいるのだ。
引きこもり+人見知りの私には、
お義父さん/お義母さん/義妹ちゃん/義弟くん
.....キリトリ.....
ここまでギリギリなのに、今回はこのメンバーに加えて、
義妹ちゃんの彼氏/義弟くんの彼女/下の家の子/
が遊びにきてた。

知らない人ばかりだ！知らない人ばかりだ！

ひとりでできるもん

昔、出張に行くときに飛行機を使ったときの話。
チョー一端折って言うと目的地への飛行機の乗り継ぎ時間がギリチョンだったので、席を一番前にしてもらった。
搭乗手続きを終えたあと、カウンターの女性に、
「これ、胸につけてて下さいね。目立つように」
と、バッジのようなものを渡された。

機上で何となくバッジを見ると、バッジには不自然に黒いマジックで塗り消されている部分があった。
その下には文字が書かれているぽい。
光に照らして読んでみると、

「おこさまひとりたび」

て書いてあった。

2006年（31歳）

神かく語りき

実家に用があったので行ってきた。

ついでに実家に住まう、唯一神にして絶対神である姉に、二〇〇六年の抱負などを聞いてきた。

姉「二〇〇六年のテーマはもう決まってるの！」

それは何でしょう。

姉「『若返り』！」

若返り。大事だよな。

姉「重点事項も決まってんの！『美肌』と『グルメ』！」

二本柱ですか。

姉「新年第一弾として、ふぐ料理を食べに行くことがもう決まってるから！」

いいですね、高級です。ふぐ。

姉「しかもほら、『ふぐ』と新年の『福』とをかけてあるから！おめでたいから！」

いや、その発想は決して若くないような...

姉「あとほら、鏡とか、手帳とか、身の回りのものは全部ピンクで統一するように決めたの！」

なぜでしょう。

姉「なぜって、LOVE運を上げるために決まってんじゃない！（姉は独身）」

LOVE運で・・・

ちょうど甥っ子（小学一年生）が通りかかったので声をかけた。

「君のお母さんになんか言ったほうがいいんじゃないの？」

甥っ子「『地獄へ堕ちるわよ！』とか？」

そうそう。そんな感じで、頼みます。

はやく醤油をかけなさい

- ・うどん（具なし）
- ・豆腐
- ・とろろ（山芋）
- ・米

ある病院の入院患者用の夕食メニュー。

患者間では

「真っ白定食」

と呼ばれているらしい。

定期的にこのメニューの日が到来するらしい。

白い。

怖い。

クソババア

全く理由が分からないのだが、なぜか毎年一回必ず、

「矯正下着会社からの勧誘の電話」

が掛かってくる。

私が好きこのんで掛けて下さいと言っているわけではないし、その会社で矯正下着を買う気など全くないのだが、

これがまた一年に一回、この時期にきっちり必ず同じおばちゃんに掛かってくるのである。

一年に一回なので最初に昨年のおさらいから入る。去年のサイズ（自己申告制）を教えてくれるのである。つっても身長と体重だけなんだけど。

おばちゃん「えーと、去年はねえ、身長が×××cmで、体重が△△kgだったみたい」

私「あ、じゃあ10kgぐらい痩せました（去年は薬太りしてた）」

おばちゃん「あらー、じゃあ、すごく垂れたでしょう？」

ほんと、買わねーぞコラ。

固定プリーズ

あまりにも早くホームに着いてしまったが発車駅なので電車の扉は既に開いていた。

自分は基本的に「座らない派」なのだが、列車が発車するまでに相当時間があつたので、がらんとした列車の四人掛けの席に一人で座ってみた。

時間が経つにつれて乗客がぽつぽつと乗り込んできた。

そして明るい声の高校生の集団を皮切りに、電車内にはどっと人が乗り込んできた。

出発時間が近づいているのだ。

さて、私の四人掛けのシートはあと三席空いている。

そこに一人の男子高校生が通りかかった。

制服の着方や鞆の持ち方はとても褒められたものではないが、整った顔立ちをしていた。

そして四人掛けの席が空いているのを見て、見かけからはとても想像できないくらい丁寧な口調で私に言った。

「ここ、いいですか？」

私は思わず必要以上ににっこり笑い、

「どうぞ」

と答えた。組んでいた足をほどいた。

すると彼は、私の対面の座席の取っ手をぐいっと握り、慣れた手つきでさっくり座席の向きをがしゃんと進行方向に変えて、さっさと私に背中を向けて座ってしまった。

さよなら、男子高校生...

転換式クロスシート...憎いわ...

びんびん

久しぶりに抑うつ状態が数日間続いていたので、旦那が仕事から帰ってきたときに、

「ちょっと元気の出るような何かをお願いします」

とリクエストしてみた。

旦那はしばらく考えている素振りを見せていたが、おもむろに立ち上がり、唐突にトシちゃんの「抱きしめてTONIGHT（「教師びんびん物語」主題歌）」をイントロから振り付きで披露してくれた。

スゴイ、満面の笑顔で。

物凄く虚を突かれた。

でも、脳の変なところを刺激されたのか、ぐだぐだしてるのが急にアホらしくなって、ぐるぐる思考が止んだ。

ありがとう旦那。

ありがとうトシちゃん。

（※トシちゃん=田原俊彦氏）

同行者

少し前のことだけれど、私が電車に乗ろうとしたときに私の横をすり抜けるようにして、同じ扉からふんわりなにかの植物の綿毛が乗ってきた。

扉が閉まり、電車がことごと走り出しても、綿毛は車両内をふんわかふんわか漂っていた。

床に落ちてしまわないか、つつい心配で目で追っていたのだけれど、全くそんな気配はなく、ふらりふらりとお行儀悪く綿毛は車両を散策していた。

そして、次の駅に着いたとき、まるで自分の意思でそうしているかのように、すーいと近くの扉からホームへ降りていった。

今は綿毛もあんな風に旅をするのかな。

それとも散歩に出かけただけで、次の列車にさっきそうしたみたいに乗り込んで、元の駅に帰るのかしら。

そんなことを考えた、何でもないできごとであった。

2008年（33歳）

多分ハイジ

旦那の仕事が忙しい。

とにかくひたすら忙しい。

もちろん休みなどナシである。

旦那と同業であった私が過去のこの時期を思い出し、思い出しゲロをしそうなくらいなのだから、ハタラキザカリの旦那の負担、推して知るべし、である。

そんな旦那は疲れている。

仕事で精神的に疲弊している。

もちろん体力的にも疲弊している。

家に帰ってくると、鬱の嫁が思い出しゲロをしていて疲弊する。

ストレスの発散場所がない。

安らげる場所がない！

我慢に我慢を重ねたであろう彼は、ある夜、ついに叫んだ！

「クララの馬鹿！」

一瞬放心状態になった彼は、数秒後に私に聞いてきた。

「俺、今、誰？」

飛び出せ青春

姉からの伝言。

「某博物館の『飛び出す映画』が、びっくりするくらい飛び出さないから、ぜひ見てみて！」

2009年（34歳）

不可解なメールの件名

昨日誕生日を迎えたのだが、例の血のつながった弟からの「誕おめメール」の件名が、

「Fw:Re:」

だったのが無性に腑に落ちない。

転送...?どこから...?何で...?

アンメルツ

私がまだ少女の頃、大人たちは肩こり腰痛というと「アンメルツヨコヨコ」を塗っていた。

あまりにもそれが日常的な風景だったのでなんの違和感もなくフツーに使っていた「アンメルツヨコヨコ」。

最近、その前身として「アンメルツタタテ（名前は多分違う）」が存在していたことを知り、全身に衝撃を受けてしまった。

タタテがあったからこそそのヨコヨコ！

タタテがあったからこそそのヨコヨコ！（どーん）

早速母を糾弾してみた。

私「タタテがあるなんてお母さん教えてくれなかったじゃない！」

母「そうお？ でもアンタが好きな『アラビックのり』にも縦バージョンと横バージョンがあるじゃない」

！

いやいや！

一瞬納得しそうになったけど問題はそこじゃないから！

「ヨコヨコ」つー安直かつ一見カワイイネーミングが問題なのであって、しかも微妙にエロい気もする。

「アンメルツタタテ」と「アンメルツヨコヨコ」。（ほら！）

どうですか！

そうですか私だけですか。

私の頭の中の小田和正

スタバで頼んだフラペチーノを飲むときに、ペース配分を間違っ、
最後に白いあわあわの永遠に溶けない何かがカップの底に残ってしまったときのもやっとした気
持ちを、
言葉にできない。

六月は衣替えだから、短大生も衣替えしてるかもとわくわくしながら駅に行くも、
短大生が学校指定のポロシャツの下に長Tを着ていたときのがっかり感と軽い怒りを、
言葉にできない。

駅の近くの公園で、
幼女←それを遊ばせている若いママ←そんなことは関係なくパピコを食べている女子高生たち←
それをフェンス越しにガン見しているタクシーの運ちゃん←タクシー運ちゃんにもものすごい勢い
で接近してくるおまわり
という構図を見てしまったときのちょっとしたときめきを、
言葉にできない。

倫理委員会

旦那と母は喫煙者である。ちょうど旦那がタバコを吸おうとしていたら、甥っ子（十才）が、
「タバコはいけないんだよ」
というようなことを言った。
甥っ子倫理委員会的にそれはナシらしい。
旦那は、
「タバコでも吸ってないとやってられないんだよ」
とタバコを吸い、甥っ子は不満そうな顔をした。
そこで姉（甥っ子の母）が、
「お母さん（自分ですな）も、たくさんお酒を飲むことがあるでしょう？ それと一緒によ」
と言った。甥っ子は、
「それもどうかと思う」
と反論してきた。

姉はケツと、

「お酒でも飲んでないとやってられないの」

と言った。

そこでアタシは、

「おばちゃんはタバコもお酒もやらないよ！」

とアピールしてみた。

瞬間、

母・姉・旦那「「「アンタは薬やってんじゃん！」」」

薬やってるなんて...傷つくわ

薬でもやってないと、人生やってられないわ。

麻婆茄子でした

私はいつもの小さなスーパーで買い物をする。

いつものレジでいつものおばちゃんに軽く挨拶をして会計をしてもらう。

私が買い物に行く時間はレジは一つしかあいていないのだ。

いつものレジ、いつものおばちゃん、いつものテンポ。

ふとおばちゃんの手が止まる。

がしゃがしゃ、と袋を調べる。レジの横に貼ってある今日のチラシを確認する。

そして私に声を掛けた。

「今日、ナスの安いのって出てたっけ？」

ごめんね、おばちゃん、ごめんね。

ナスだけ定価で買って、ごめんね。

結婚記念日

珈琲豆屋のマスターんところが結婚記念日だったようで、ブログに記念日らしい記事を書いていた。

よその家の記念日は感動的で美しい。

金婚式、銀婚式などの言葉は聞いたことあるが、どうやら他の結婚記念日にも毎年「〇婚式」のような名前があるらしい。

ちょっと調べてみたら、我が家は今年は銅婚式だった。

もう結婚記念日はとっくに過ぎていたので、来年のを調べてみた。

もしも来年まで無事に婚姻関係が続いていたとしたら、来年は、

「ゴム婚式」

らしい。

ゴム婚式とか、やる気なくすわ！（何の？）

2010年（35歳）

おやっさん！ ギャグー丁！

さっき、旦那が、
「Do you know me?」
と言いながら湯飲みを探していた。

もうだめだ。
おしまいだ。

双極性障害だけど自動車学校11

世間的にiPadの話題で盛り上がってるところ申し訳ないんだけど、

明日仮免の試験（どーん）

今日「みきわめ」的なものをして、教官が、
「まあ、まあまあ取りあえず一回受けてみやんせ」
と言うので、そういう運びとなった。
明日は旦那が休日なので、予定を入れやすいよう「あしたかりめんしけん」とメールを送ったら、
さっき電話があって、
「まあ、俺の去年の管理職試験みたいなもんだと思って受ければいいよ！」
と言われた。

それ、落ちたやつだよな。

（※この頃普通免許を取りに自動車学校に通っていた。とてもたくさんのお金と時間を費やした）

ハードボイルド・ママ

実家のドライバー（ブラシが一体になってるやつ）の調子が悪いらしい。

母「どうもきな臭いのよ」

事件スか？（わくわく）

一般人にありがちなささやかな間違い

姉が転職をした。

新しい職との合間に少し期間があったのでその間にバイトをしていたのだが、
そこのバイト先のおばちゃんたちからとっても可愛がられ、辞めるときにお別れ会のようなもの
まで開いていただいたらしい。

そのときにおばちゃんの一人からもらったというストラップを見せてくれた。

姉「可愛いでしょ、ほら、キキ」

うん、それは、ジジ。（教えてあげました）

ペットボトル

通りがかりの動物病院の敷地内に、みっちり「ネコ水」が並べてあった件。

強い水

だいぶ前のことになるが、甥っ子（多分まだ全然小学生だった）が遊びに来ていたときに、相当暇すぎて、

「何でもいいからかっこよさそうで強そうな技名を言い合う」
という二人考案の遊びをしていた。
二人で。

「スーパーストロングタイフーン！」
「マキシマムフレイムタイガー！」
「円月燕返し！」
「ヨガファイア抜刀牙！」
みたいなことを延々言い合ってるのである。
二人で。

そうこうやっているうちに、お互い声も大きくなり、何というか動作的なものもついてきはじめたころ、感極まった（追いつめられた？）甥っ子が言い放った。

「クリスタルカイザー！」

うん、

水、

だ。

初体験は無意識に

Excelで資料の整理をしていて、その途中で出かけなければいけない時間になってしまった。
私は三歩あるけばすべてを忘れるトリ頭なので、自分が何をしている途中なのかノートにメモっ
ところと思って、
「Excel作業中」

と書こうとしたら、暑かったからか、バカだからか、なぜか、気づいたら、

「EXILE」

と書いていた。

多分「EXILE」って単語書いたの、人生で初めてだと思う。

2012年（37歳）

広告に偽りなし

お湯を沸かそうと思って、ケトルをコンロにかけていた。
もうそろそろかなと思って見に行ったら、
何かぐらぐらきてるなあもうそろそろだなあという雰囲気醸し出していたが、
突然目の前で、超テケトウに付けていた笛吹き部分が、ロケットのようにスポーンと飛んでいった。

お、値段以上、ニトリ♪

ハードボイルド・ママ2

母の誕生日に誕おめメールをした。
速攻返事が来た。

「メールありがとう。また今年も誕生日を迎えました
私はまだ老人ではありません
またランチに行きましょう」

二行目、二度見したね。
一生懸命考えてみたが、多分だけど、

「まだまだ若いお母さんですo(^-^o」

みたいな感じを出したかったんだと思う。
思うが娘とはいえ少しは気を遣って欲しいナ（←こういうやつ）。

職場でも

七月さんログインされましたので今月の旦那。

旦那「職場の俺の部屋以外の部屋にエアコンがついた」

不憫よのう...

ニャーならんと欲すればニャーならず

猫がいる生活になったからであろう。旦那が割とカジュアルに語尾に「ニャー」をつけるようになった。

イタイと思う。スルーしてる。

が、どうしても腑に落ちない点があるので書こうと思う。

私が旦那になんか用事があったときに、ふとお昼の番組のタモさん風に、

「〇〇して、くれるかな〜？」

と言ったことがあった。流れで。

(多分「お湯湧かしといてくれるかな〜？」みたいな感じ)

そしたら、返事が、

「ニャーとも！」

だった。

そのときはうっかり流してしまっただが、どうしても気になる。

そこは、「ニャーとも！」ではないんじゃないかと。

そこは、「いいニャー！」が適切なのではないかと。

「ニャーとも！」では、要するに「ナリでござる」みたいな感じになっちゃうんじゃないかと思うのである。語尾+語尾みたいな。

なので旦那に言ってみた。

「俺もそう思うよ。でも、『ニャーとも！』の方が、心に響くデショ」

心に響く...だと...！ ...確かに...！

そう考えてみたら「ナリでござる」もちよっと心に響く...いやいやそれはどうでもいい。

旦那の読書感想文的発想に納得しかかってしまった年の暮れであった。

共宙語で話して

夕食後、ふとした沈黙が流れていたときに、旦那が、
「何考えてるの？」
と聞いてきたので、正直に、
「『ドラえもんは22エモンだなあ』って考えてた」
と答えたら、夫婦の間により一層の深い沈黙が訪れた。

それから

とうが立つ、と言うじゃないですか。

盛りを過ぎる、という意で使われる言葉ですが、婚期を逃しちゃうような微妙な年齢の女性にも使われるじゃないですか。なんか、やーなニュアンスで。

幼いころから自分が結婚できないことに絶大なる自信を持っていたこともあり、「とうが立つ」という言葉は「いばら姫」の一三番目の魔女の呪いの言葉のように深く深く私の心に刻まれていたのである。

が、大人になるにつれて、別の方に興味が移っていった。

とうが立ちますよね。じゃあ、とうが立ったら、その後どうなるの？

女性の話でなく、語源である植物のほうである。

なにやら否定的なニュアンスで使われる「とうが立つ」であるが、当の（韻を踏んでいるわけではない）植物のほうはとうが立ったら一体どうなっちゃうのだろうか。

と思っていたら、ちょうど都合のよいことに、実家の近くの病院の花壇の葉ぼたんにとうが立っているのを発見した。

...これを観察し続けたら、長年の謎が解ける...

と思いながら実家の近くに行くたびに病院の花壇をそっと観察する私。

葉ぼたんのとうは、行くたびに伸びていった。

えっ、伸びるの？ そっちのほう？

戸惑いを隠せないが、伸びるものは伸びるのである。

そして、伸びていった先について...

私「...どうなったと思いますか？」

珈琲豆屋のおっちゃん「花が咲いたんでしょ」

早！ 早いよおっちゃん！

珈琲豆屋のおっちゃん「いや、常識だと思うけど」

常識なのか！ いや、そんなことはどうでもいいのである。

とうが立ったら、その後には花が咲くのである。

なんたるハッピーエンド。そうなのである。わたくしたち女は花を咲かせる運命（さだめ）に生まれたのである。華やかに激しく生きろと生まれたのである。

生まれたからには、気高く咲いて、美しく散るのである。まだ散っちゃダメ！

旦那の声に灯がともる！

美容院で髪色を黒く戻して、念願のおかっぱ頭にしてもらってきた。のだが見慣れない自分の姿に黒髪おかっぱという選択肢が間違っていたような気がしてきた。

で、私も面倒くさい女なので、家に帰ってから、

「なんか髪型失敗した気がスルー」

とグジグジ言っていたのである。

しかしそこはもう家庭内に波風を立たせないことに関しては達人ママ（※）の域に入っている旦那が、

「そこそこ似合ってるんじゃない？」

「そこそこ可愛いんじゃない？」

と死んだ魚のような目をして合いの手を入れてくるのである。

しかしながら私も面倒くさい女オブザイヤー殿堂入りを果たそうかという強者である。

私「本当に似合ってると思う？」

旦那「うん、似合ってると思う（死）」

私「本当に可愛いと思ってる？」

旦那「うん、可愛いと思う（死）」

私「じゃあ、綾瀬はるかで喩えたらどのくら

旦那「悪いけど綾瀬はるかで喩えることはできない！（生）」

そんな喰い気味に否定せんでも……

（※達人ママ=インパルスのコントのネタ）

招く手

その日乗車した電車は自分が普段利用している時間帯の日豊本線には珍しいロングシートタイプの車両だった。

普段は何となく立って過ごすことが多いのだが、昼間の時間帯で人もまばらにしか乗っておらず、長い座席にぽつんぽつんと人が座っているぐらいの感じだったので立つのもなんか変な感じだし座ろうか・・・と車両を見渡すと、なぜかロングシートまるまる一シート分、全く誰も座っていないシートがあった。

わーいシート独り占め～♪

とは決してならない性分の女（もうすぐ初老）である。

他のシートにはぽつぽつと二～三人ぐらいは座っている状態である。なのにそのシートだけ不自然に誰も座っていないのである。

なにかあるなど。これはなにかあるなど。

私は無駄に脳みそをフル回転させてそのシートに誰も座っていない理由をコンマ一秒ぐらいの間に考えた。

仮説1：なんか分からないが臭いのではないか。

仮説2：さっきまで誰かが乗っていてそのシートに何か（ジュースとか）こぼした。。

仮説3：さっきまでそこに座っていた人のガラが悪かった。（その人は今私が乗った駅で降りた）

仮説1・2の場合はシート近くまで行ったら判別できるであろう。仮説3の場合だったら別にもうなんの問題もない。

というわけで私はそのシートの近くまで移動し、シートを疑り深く観察した。

特に不審な点はない。

では。

私はそのシートに腰を下ろした。長々書いているが、この時点でまだ電車は駅のホームでドアを開いている状態である。

さて、シートに腰掛けた私の対面に、私の母親ほどの年齢の女性が座っている。その女性が不思議な動作をしている。

胸の前に右手を小さくあげて、ごく控えめに手首を振っている・・・私に向かって・・・？

その動作は、どう見ても、

…オイデオイデ…？

しまったここやっぱりワケあり物件か！

私はびょんっと立ち上がり、導かれるまま今座っているシートと反対側のシートの、その女性の隣にびゅっと座った。

他の誰にも見られていないはずである。誰も気づかないぐらいの移動速度だったはずである。

「あそこの席ねえ…」

女性が、声を潜めて私に話しかけてくる。私はもちろん耳をそばだてた。どんな悪い秘密が隠されているというのか。

そのとき、電車のドアが閉まり、ゆっくりと進行方向に動き始める。

「あそこだけ、すごく陽が当たるの」

影を作っていた駅のホームを抜けた今、それは私の目にも明らかだった。錦江湾の海沿いを走る日豊本線の、その車両の、不思議なことにそのシートだけ、めっちゃ陽が当たってた。

二分後、電車は次の駅に到着した。

そこで若い女性が乗ってきた。若くてちょっと尖った感じの可愛い女性。

ちょっと周りを見渡しええっと…という感じで逡巡したが、やはりちょっとおずおずと誰も座っていないロングシートに座った。

その若い女性は周りの誰からも干渉されたくないわ！というオーラを放っているように感じたのでちょっと迷ったのだが、ちょっと隣を伺うと、同じようにこちらを伺っている隣の女性とぱちんと目が合ったので、

私たちはちょっと笑って、ぴよぴよぴよと対面の席に座る彼女に向かってそろって小さく手招きした。

主婦・失格

あまりにも料理をしていなさすぎる生活を送っているので、さすがにたまには野菜炒めでも作ろうと玉葱を切っている途中、
何のためらいもなく目をこすってしまうという天罰が下った。
twitterに書く勇気がなかったのでここに記す。

絶えず、語りかけている

夕食を作り終えて自室に戻ろうとしたら、窓の隙間からリビングの壁に夕日が差し込んでいた。
薄暗い部屋のなか、小さくそこだけが明るく灯され、漆喰のなかの砂がきらきらと光を反射していた。

それはなにかの言語のように感じられ、
それは私に向けられたもののように感じられ、
私は不思議な気持ちでシャッターを押した。

カメラを元の場所に戻し、
再びその場所を通ろうとしたとき、
ほんのそれだけの時間であったのに、
日は落ち、
壁を灯す光はなく、
そこには薄暗い壁があるだけだった。

そのとき、
ただ、じんわりと、
地球がひとつくるりと周り、太陽が昇りそして沈んだこの一日を私が生きたのだということが水のように体にしみ込んでいくのが分かった。

おやすみなさい。

また明日お会いしましょう。

よりぬきそううつだもの

<http://p.booklog.jp/book/106084>

著者 : ayachi75

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ayachi75/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106084>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106084>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ